

令和7年度 学校関係者評価書(様式)

鈴鹿市立神戸小学校				
評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
学力向上×ICT活用	<p>①授業改善・基礎学力の向上 「主体的に学びに向かう子の育成」の視点に立った授業改善。自分の考えを伝え合う対話的な活動を通して研修を推進する。学校アンケートで検証。</p> <p>②授業でICTを活用する 教員はICT支援員による研修を受け、ICT活用指導力を向上する。児童は、スライド作り・ドキュメント作り・家庭学習にICTを取り入れるなどし、ICT活用能力を高める。学校アンケートで検証。</p> <p>③家庭学習の充実 家庭学習の手引きを配布し、啓発を行う。また、毎学期に家庭学習強化週間を設定する。家庭学習チェックシートで保護者のコメントから検証。</p> <p>④読書活動の充実 学校図書館、学級文庫の環境整備。図書委員・ボランティアによるイベント。巡回図書を活用。毎週月曜日に朝読書の時間を設定する。学校アンケートで検証。貸し出し冊数の検証。</p>	<p>①「授業中に、自分から進んで問題に取り組んでいる」の項目で、8割以上の児童が肯定的に回答しており、研究主題の視点に立った授業改善を行ってきた成果といえる。あとの2割の児童も主体的にしていくなためにも、授業の始め(導入)を工夫していくことが大切であると考える。 しかし、「発表している」となると、割合が少し減少している。「話し合いたい」と思える授業計画・手立てをとる、発表しやすい教室環境を整備していかなければならない。 基礎学力の向上については、授業の中で知識・技能を身につけていく時間を意識してとっていく必要がある。</p> <p>②「クロームブックを使った家庭学習は、学びやすいか」の項目で、8割以上の児童が肯定的に回答しており、児童のICT活用能力は高まっている。しかし、新しい活用方法がどんどん生まれ続けており、教員も活用指導力を高め続けていかななくてはならない。</p> <p>③家庭学習強化週間における保護者のふり返りで「読書やメディアコントロールは、普段より意識できました。」「期間が終わっても続けてほしい。」「という意見があった。意識して取り組んでもらえる家庭にとっては、生活を見つめ直す良い期間となっている。しかし、家庭による温度差はあり、意識して取り組んでもらえる家庭を増やしていく工夫を考える必要がある。</p> <p>④毎週月曜日のモジュールの時間に朝読を設定したことで、本に触れる機会を最低限保証することができた。しかし、「読書が好きか」の項目で、4割程度の児童が否定的に回答しており、来年度の課題として改善が必要である。</p>	<p>①授業改善・基礎学力の向上について ・学級が開かれていると感じる。先生たちが積極的に公開していく姿勢は持ち続けてほしい。</p> <p>②授業でのICT活用について ・多くの子どもたちは、ICTに慣れてきている様子が見られた。 ・クロームブックの操作が苦手な子どもたちへの支援を丁寧にしていただきたい。</p> <p>③家庭学習について ・保護者が期間中に、携帯をずっと触っているなど意識できていない家庭もあるのではないかと。 ・期間が終わっても意識できるように手立てが必要。 ・メディアの正しい使い方を身につけさせていく必要がある。 ・強化月間は、中学校と連携した取組を続けてもらいたい。 ・家庭学習の手引き等も活用しながら、強化週間の充実を図る必要がある。 ・家庭学習の手引き等を、運営委員にも見せてもらえるとう理解しやすい。</p> <p>④読書活動について ・朝の読書の取組、図書室の掲示等は良い。 ・図書室を充実させるために、机・イスの配置や読書スペースなど、環境の変化を考えても良いかもしれない。 ・「読書」と固くなるのではなく、イベント等を活用しながらハードルを下げるべき。 ・学級文庫、図書室前の辞書もきれいなものに入れ替えられるように、みんなで考えていく必要がある。 ・子どもは、テレビ、YouTube、ゲームなど、受け身で楽しめる方法に囲まれている。低学年のうちに、本を読むことの楽しさを知ってもらうためには、ボランティアの方や、担任の先生による読み聞かせが有効ではないか。</p>	<p>①今後も積極的に授業を公開し、放課後等に、アドバイスし合うなどして、授業力の向上に努める。</p> <p>②ICTの活用方法に関する研修を積極的に行う。また、新しい使い方、工夫した使い方を行っている教職員から積極的な共有を図ることができる機会を設ける。</p> <p>③家庭環境(背景)に配慮しながら、取組が難しい児童への声かけや、頑張っ取り組んだ児童への認めを積極的に行い、児童が達成感を得られるよう取り組む。担任からの声かけが重要となる。</p> <p>④月曜日の朝読を継続したい。 高学年は、朝読を行っている月曜日以外のモジュールの時間に本を借りに行くことや、週一度の巡回指導員の来校日を利用して、授業の隙間時間に図書室に行けるようにすることを検討する。 読み聞かせボランティアさんの活用を図ることができるよう、地域コーディネーターとも相談したい。</p>
	長期欠席対策	<p>①全欠児童については、支援会議や家庭訪問を通し、常に児童について把握、情報共有を図る。放課後(1週間に1回程度)本人や保護者が来校し担任とつながる。</p> <p>②登校渋りや遅刻・欠席が多い児童を把握するとともに、その理由をアセスメントし、明確な理由がなく3日以上続けて欠席がある場合には家庭訪問を実施して家庭訪問シートにまとめ、情報共有を行う。また、週1回の特別支援教育コーディネーター会議での情報共有を行う。</p> <p>③欠席30日以上の子童数を減らす。不登校傾向にある児童については、生徒指導部の不登校担当と特別支援教育コーディネーター、SLSが連携して対応に当たる。</p>	<p>①全欠児童とは支援会議や家庭訪問を通して担任とつながることができた。オンラインを活用して、週に数時間学級での授業に参加できた児童もいた。担任の働きかけによって全欠児童が学校に少しでも気持ちを向けることができた。保護者の願いも聞きながら、次年度にも活かしていきたい。</p> <p>②配付物の受け渡しを介して、友だち、担任、学校とのつながりを持ち続けられた。 週1回の特別支援教育コーディネーター会議(管理職、コーディネーター、教育支援課、SC)や、月1回の職員会議で、職員全体での情報共有を行うことで、学校全体として不登校傾向児童を把握し、対応することができた。また、教員研修として学期初め子どもたちへの支援の在り方や、学級づくりの大切さを伝えることにより、未然防止に少しはつながってきている。 SLSによる家庭訪問や、朝の登校時の支援のおかげで、児童が安心して学校生活を送ることができた。学校での困り感を減らすため、通級指導教室につなげることにより、登校ができる児童もいた。SSWと連携して保護者対応にあたることもあった。</p> <p>③担任が休みはじめに迅速な対応(電話・家庭訪問・本人との話)をしているが、家庭の事情や本人の気持ち、体調不良、保護者の考え方など様々な要因があり、学校としてできる手立てが難しい場合が多い。 欠席30日以上の子童数は、昨年度より減少傾向にある。</p>	<p>①②欠席・遅刻の多い児童への対応等について ・対応が難しい中、教員が連携しながら子どもや保護者に対応してもらっている。 ・関係が切れていかにように、オンライン授業等を活用しながら、つながりを持ち続けてほしい。</p> <p>③欠席30日以上の子童数減少への取組について ・SLS等を効果的に活用しながら、今後も登校を支えてほしい。</p>
評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点

評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
地域連携	<p>①学校ボランティア活動の活性化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア担当、地域コーディネーターが窓口となり、地域学習や出前講座などに学校ボランティアを活用する。 ・学力向上、学習支援、児童への細やかな対応に向け、新たなボランティアの募集と活用を図る。 ・学校、家庭、地域と連携した見守りで、児童の交通事故ゼロを目指す。 <p>②情報提供の充実を図る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校ホームページ、学校だよりの地域配布による情報提供を主とし、学校だよりに学校HPのQRコードを掲載することで、HP閲覧の機会を増やす。月間1部以上の発行を目指す。 ・学校の活動や児童の実態をより具体的に知っていただくため2学期に学校運営協議会委員の参観の機会を設定する。 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	<p>①学校ボランティア活動の活性化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域コーディネーターを核に、ボランティアの相談・計画を進め、多領域でボランティアの活用を図ることができた。 ・図書ボランティアは、図書巡回指導員が来校する木曜日を中心に定期的に活動していただき、校内に季節毎の掲示や、図書室イベントの準備など、環境整備を進めていただいている。 ・調理実習の支援、図工の制作支援、校外学習の引率見守り、日本語指導支援、1年生の給食準備補助など、学校の必要性に応じて多岐にわたり、支援いただいた。 ・安全ボランティアは随時主要交差点等で見守りをいただき、登下校時の交通事故発生はゼロであった。 ・学校からボランティアへの一括した連絡手段の整備について、マチコミによる連絡を計画したが、今年度は活用に至らなかった。 <p>②情報提供の充実を図る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学期ごとの学校生活に関わる記事は5件程度であった。学年にも差があり、個人情報に配慮しながら、発信の在り方について吟味検討が必要である。 ・学校だよりに関しては、月平均1回以上の発行を行った。また、電子版をtetoruを通じて直接保護者の手元に配信した。 ・委員の方々に対し、2学期に参観日を設定した。また、学校運営協議会当日にも授業を見ていただく機会を設定した。今後も児童の様子を見てもらう機会を計画したい。 	<p>①学校ボランティア活動について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業サポートボランティアは約10名いる。もう少し増やしていきたい。 ・子どもたちの安全を守ることができた。 ・交通安全ボランティアで旗持ちをしてくださっている人へのサポートが必要ではないか。 <p>②情報提供の充実について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業参観の機会を設けてもらえて良かった。 ・今年度は、2年生の学習活動で地域の見守りボランティアを授業に招いていただいた。その次の朝には、子どもたちからの積極的な声掛け、あいさつがあった。 ・地域のボランティア活動を学習活動に入れていくことは、学校運営協議会制度の推進のためにも重要なことだと思う。 	<p>①授業サポートボランティアの増加に向けて、来年度も、4月に保護者向けお便り、5月の回覧板でのお知らせを行う。</p> <p>地域の見守りボランティアをゲストティーチャーとして招いた授業があったことを、職員間で引き継いでいく。</p> <p>②今後も授業参観や行事を通し、子どもたちの実態を具体的に把握していただき、学校運営協議会での熟議につなげたい。また、今年度始めた学校だよりのtetoru配信を継続するとともに、HPでの発信の充実を図りたい。</p>
非認知能力育成	<p>「自己肯定感」「達成感」を高める</p> <p>①授業の中で、達成感をもたせられるように授業づくりから計画する。</p> <p>②学年通信や学校だよりで、人権学習の取組や、学校アンケートの結果を伝え、家庭、地域へ発信する。校内アンケートで検証する。</p>	<p>①非認知能力を高める取組について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「今の自分に満足している」の「あてはまる」の割合が低く、この中には、もっと頑張れる、頑張りたいと思っている児童もいるのではないかという意見がでた。しかし、本当にあてはまらないと答えた児童について、どのようなところに満足できていないのか探っていく必要がある。 ・「私は自分という存在を大切に思える」や「自分には良いところがある」については、8割以上の児童が「あてはまる」と答えている。日々の取組だけではなく、ちょっとした声掛けを、普段教師が意識して行っていることも手伝っているのではないかと考える。 <p>②取組等の発信について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今年度も通信で人権学習について掲載したり、あゆみ渡しの際に、人権学習をまとめた掲示をしたりしてきた。掲示については、児童や教員の目にもふれるため、他学年がどのような人権学習をしてきたかがわかり、勉強にもなる。保護者からの声も聞けると、更に参考にしていけると考える。 	<p>①非認知能力を高める取組について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・非認知能力は、学校生活全体で育んでいく意識をもつべきである。あいさつ、休み時間、授業、行事、あらゆる場面で育むことができると思う。 ・一つひとつの行事で、その行事でしか育めない力もあるので、大切に取り組んでほしい。 ・非認知能力を育むためには、何より家庭教育が重要だと考えられるが、学校教育の中で育成するために、小学校入学後でも、学習規律、あいさつ、言葉遣い、整理整頓を身につけさせることは可能だと思う。最近では、きめ細やかな対応を要する家庭も増えているので、大変なこともあると思うが、先生方には頑張っていたきたい。 <p>②取組等の発信について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの肯定感を高めるような掲示が増えてきている。子どもを見守る意識をもち続けてほしい。 	<p>①非認知能力を高めることにつながる活動や場を道徳や総合の授業などで意図的に組み込む。その中で、「自分に満足できる」といった思いを感じさせることのできるよう、教員からの声掛けや取組を考え、実践していきたい。また、それぞれの学年でしか経験できない行事があり、その行事から得られる達成感や責任感を感じることができるよう指導を進める。あわせて、基本的な力の「あいさつ」や「感謝の気持ちをもつ」なども日々子どもたちに伝えていきたい。</p> <p>②掲示を通し、一度学習して得た知識や考え方を何度も見ることで、「一回学習したから終わり」となることなく、学習内容を思い出したりその後生かしたりすることができるように今後も取り組んでいきたい。</p>
特別支援教育	<p>①子ども・保護者への対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭訪問や個別懇談を行い、保護者と連携した支援を推進する。 ・特別な支援が必要な児童について、「すずっこファイル」を学期ごとに作成し、学年末には評価・考察を行う。(作成率100%) ・支援ファイル保持者について、必要に応じて月ごとに経過・変容を記録していく。 <p>②学校の対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別支援教育コーディネーターを4人配置し、週1回情報共有や今後の方針を検討する会議を開催する。必要に応じて会議に助言者を招く。 ・特別支援教育コーディネーター等が校内を巡回し、支援の必要な児童の把握及び適切な支援方法の提案を行う。 ・推進委員を各学年から1名選出、校内推進委員会を各学期に2回開催する。 ・支援会議を随時開催し、情報共有や今後の方針の検討を行い、学年、通級指導教室、保健室、特別支援学級等での迅速な対応を促進する。 ・スクールライフサポーター、スクールカウンセラーを活用する。 ・特別支援教育に係る校内研修を実施する。(年1回以上) ・通級指導教室、特別支援学級の授業参観を行う。(年1回以上) 	<p>①子ども・保護者への対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭訪問や個別懇談を行うとともに、必要に応じて支援会議を開催することで、多くのケースで保護者と学校が連携して支援をすることができた。 ・学校と家庭で児童の様子が異なることなどから、短期間で学校と保護者が連携して支援を考えることが難しいケースもあり、「すずっこファイル」の作成率は100%にできなかった。 <p>②学校の対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・木曜日2時間目の会議(特C O会議)を時間割に位置付けることで、定期的に児童の情報共有や支援の方向性の検討をすることができた。その結果、個人ではなく、組織として適切な支援内容や支援体制を判断することができた。また、必要に応じて外部から助言者を招くことでよりよい支援内容を考えることができた。 ・特C O会議で、全校体制での支援が必要と判断した場合は、企画委員会で対応を検討できるようにした。 ・多くの職員が通級指導教室及び特別支援学級の授業を参観できるように約3週間の授業公開期間を設けた。 ・すずっこファイルの書き方にかかわる校内研修を1回設けるとともに、職員会議の中で特別支援教育にかかわる短時間の研修を複数回行い職員の資質向上を図った。 ・推進委員会を1、2学期は2回開催した。特C O会議が上手く機能しているため、3学期は1回の開催とすることができた。 ・1、2学期の推進委員会は、各学年でのすずっこファイル検討会と情報共有の時間を設定し、学年で支援が必要な児童について検討した後、特C Oで集約し全校の支援体制を検討した。定期的に全員が検討する機会を持つことで、より広い視点で支援体制の検討を行うことができた。また、記録の書式を変更したことで、通年で児童の変化が見やすくなった。 	<p>①子ども・保護者への対応について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「すずっこファイル」の作成については、保護者の協力を得られないと作成できないので、難しい対応だと思う。 ・保護者の思いにも寄り添いながら支援を考えてほしい。継続した働きかけをしてほしい。 <p>②学校の対応について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちは毎日の生活の中で、上手にかかわりながら対応している。支援が必要な子もそうではない子も、みんなが楽しく学校で過ごせるようにしてもらいたい。 ・そよなかたん通信なども効果的に活用し、共有を図っていけたら良いのではないかと。 	<p>①「すずっこファイル」が必要な児童には特別支援教育コーディネーターを中心に校内で検討して、支援会議などで丁寧に保護者に伝えるよう心がけている。一度で納得されなくても回を重ねて働きかけているので、情報共有をしながら根気強く続けていきたい。</p> <p>②普段の声掛け、授業をとおして、相互理解できるように取組をしながら子どもたちのかかわりを見守っていききたい。</p>
評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点